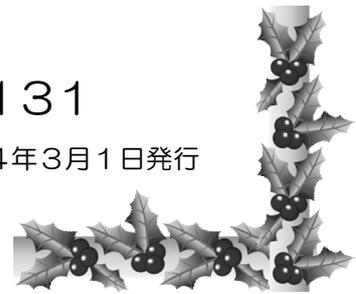


社 会 福 祉 法 人

るうてるホーム No.131

(後援会ニュース) 2014年3月1日発行



「協力と前進」

常務理事 石倉 智史

神様は本当に時に応じて感謝することを与えてくれるものだと思う出来事がありました。ちょうどこの後援会ニュースの原稿を書こうと思ったその日のるうてるホームの朝の礼拝での讃美歌が385番だったのです。

うたがい迷いの 闇夜について
恐れずたゆまず われらは進む
行く手にかがやく み光あれば
共に手を取りて よろこび進む

るうてるホームの移転計画が本格的に取り組まれるようになったのが2010年度でした。そして、多くの方々の祈りの中で昨年10月には計画通り新しいるうてるホームが与えられました。

われらを結べる みたまはひとつ
われらに通える いのちもひとつ
ひとつの御糧に はぐくまれつつ
ひとつのめあてに 向かいて進む

計画段階から「新しいるうてるホームはひとつになる」ということをコンセプトにおいてきました。それぞれの事業の歴史、組織、取り組みが一体化され、「るうてるホーム」としてこれまでと変わらずお客様に仕えていくことを私たちの理念にし、進んでいこうということが建築委員会を中心に

何度も何度も話されてきたことが思い出されます。

ほまれも栄えも たがいに分かち
憂いも悩みも かたみにうけて
ひとつのみいくさ 共にたたかい
ひとつの勝ち歌 ひとしくうたう

もちろんこれからの進む道は穏やかなことばかりではなく、曲がりくねった険しい道もあると思います。そのような時にあっても、「ともに喜び、ともに泣く」ことを神様は教えてくれています。様々な艱難に出会うこともあるでしょうし、道を見失いそうになる時もあるかもしれません。しかし、私たちの実践(福音)を述べ伝えようという熱い情熱が消えることのないようにしたいと思います。

そして……。いかなる困難があっても、与えられた道を共に歩むことに確信を抱き、新しいるうてるホームが迎えるそれぞれの時を大切にし、「いつも喜び、絶えず祈り、どんなことにも感謝」し続けることができると願っています。

いざいざ はらから 十字架を負いて
み国の道をば おおしく歩まん
世の旅終わりにて 栄えの主より
生命のかむりを たまわる日まで

開所してはや5カ月です

通所事業部 杉本匡子

開設して早5か月が過ぎようとしています。当初慣れないハードにとまどいながら業務を進め、やっと落ち着いてきたところです。

通所介護事業部では、高齢者デイ 35名、障がい福祉事業として生活介護 10名、就労継続支援B型 10名のサービスを行っております。お陰様で、高齢では体験利用の方が多く、新規利用のご契約もいただくことができています。生活介護でも、ご利用者が徐々に増えてきている状況です。

オープン前より、新施設でのコンセプトを「みんなで作るデイサービス おひとりおひとりが主人公」として取り組んで参りました。高齢デイでは、プログラムの立案等を、利用される方の立場に寄り添ってサービスを考える姿勢で取り組んでいます。

障がい事業は、これまでは基準該当事業所で高齢者と一緒にお過ごしいただく形でしたが、10月から心機一転多機能型の事業所として指定を受け、現在奮闘中です。生活介護事業は障がいを持った方々の食事や入浴などの日中の生活支援を行っています。

もう一つは就労継続支援という事業で、障がいをもった方と共に働き、就労までの道筋を共にする事業です。将来的には、るうてるホーム清掃部門をすべて担いたいと夢を持っているところです。

るうてるホーム50年の歴史の中では、これまで障がいのオリジナルサービスがなく、今は試行錯誤の中で進めています。まだまだ荒削りなところもありますが、これから経験を重ね、るうてるらしいサービスを創り上げていこうと思っています。

そんな中で、私たち「るうてるホームは介護のプロ」というアピールは間違いなく私たちの宝物です。自信をもって突き進んでいきたいと思えます。

また、この事業に一番大切なのは人材です。スタッフのスキルアップ、モチベーションの維持を念頭に置き、人材育成を目指します。

在宅の方々の日中支援の場として、生活の糧となる場として、るうてるホームがさらに活躍できるよう、職員一体となって日々研鑽してまいります。



とまどいながらも～ユニット・ケアへの挑戦～

特養事業部 高田真希

特養では昨年10月の新築移転を機に、ユニットケアに取り組み始めました。ユニットケアとは、入居者10名を1グループ（ユニット）として生活空間を整え、入居者と職員とのなじみの関係をベースにケアを展開していく手法です。

移転後、部屋はすべて個室になりました。個室には家具や家電を持ち込み、ある程度お好きなようにレイアウトをしていただくことが可能です。また、10室ごとにリビンググループが設けられており、食事をしたり、お客様同士交流したりすることができます。うるてるホームの場合、リビングには対面式キッチンが設けられていますので、お客様と職員のコミュニケーションは比較的とりやすい環境と言えます。

さて、10月から上記のような環境が与えられ、私たちのケアの内容も大きく変化してきています。例えば、食事は従来のように生活空間から離れた厨房で用意されるのではなく、キッチンを使いお客様のすぐ目の前で盛り付けがなされます。食器や湯飲み、箸などもそれぞれに使い勝手が良く好みの物を使用していただけるようになりました。

お風呂は各ユニットに設けられ、着替えの準備から入浴、風呂あがりまで同じ職員がマンツーマンで対応します。以前のように、着替えの準備をする人、誘いに行く人、着替えをする人、お風呂で身体を洗う人…など介助の場面ごとに職員が交代することがないため、対応に連続性が保たれ、お客

様が安心して入浴できるようになってきています。また、トイレについては部屋のすぐ近くに設けられたため、ベッド脇のポータブルトイレを必要としなくなるケースも複数出てきています。

このように特養は10月以降様々な変化を遂げてきていますが、何より変化したのは、職員の「個」を見る視点です。ハードがある程度整えられ、ユニットケアに取り組み始めたことで、職員の気づきが少しずつ深まり、お客様への対応もより個別的で細やかな配慮ができるようになってきています。また職員の対応により、これまで想像もしなかったようなお客様の言葉や表情、行動などが引き出される場面も出てきています。

従来ではなかなか実現できなかったことが、移転を機に変化し始め、日々新しい「発見」があるのはたいへん喜ばしいことですが、まだまだ緒についたばかりです。私たちは移転に伴い、お客様の可能性や主体性を引き出す仕掛けを数多く与えられましたが、そこに魂をこめていくのはこれからです。

いくらハードが与えられユニットケアに取り組んでも、お客様お一人お一人は見ようとしなければ見えませんし、声は聴こうとしなければ聴こえません。ニーズは意識し続けなければ見えないということを常に心に留め、お客様お一人お一人の暮らしを大切にし、想像力を働かせながら日々のケアを充実させていきたいと思っています。



